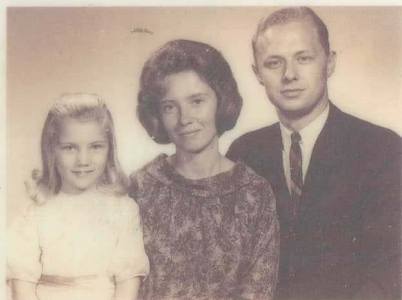




エイズで死んだ父へ

ANONYMITY

The Secret Life of an American Family

スーザン・バーグマン

亀井よし子[＝]訳



晶文社

著者について

スーザン・バークマン

一九五六年、米国インディアナ州生まれ。オハイオ州のホイートン大学で美術史を学んだのち、シカゴの大学で教鞭をとりながら『アンタイオス』『ノース・アメリカン・レビュー』『ブラウシェアーズ』などの雑誌に、詩やエッセーを発表している。

訳者について

亀井よし子（かめい・よしこ）

一九四一年、東京生まれ。富山大学英文科卒業。翻訳家。

訳書―A・ピーティ『燃える家』（ブロンズ新社）、E・ジョング『五十が怖い』（ダン・トニオ『アトミック・ハーベスト』（いずれも小学館)、ウオーリス『ふたりの老女』スターン『もし、赤ちゃんが日記を書いたら』（いずれも草思社）、D・アリスン『ろくでなしボーン』（早川書房）、ライヒェル『目に見えない傷痕』（晶文社）ほか多数。

エイズで死んだ父へ

一九九七年六月三〇日発行

著者 スーザン・バークマン

訳者 亀井よし子

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―一二

電話東京三二五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替〇〇一六〇―八―六二七九九

中央精版印刷・美行製本

Printed in Japan

図本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（〇三―三四〇―一二三八二）までご連絡ください。

（検印廃止）落丁・乱丁本はお取替えいたします。



エイズで死んだ父へ

工業学院図書館

ANONYMIT
The Secret Life of an American family

蔵書章
バーマン
黒井よし子 訳



晶文社

晶文社 定価 [本体2300円＋税]

ISBN4-7949-6311-4

C0098 ¥2300E

エイズで 死んだ父へ

スーザン・バーグマン
亀井よし子^訳



晶文社

ANONYMITY

The Secret Life of an American Family

by Susan Bergman

© 1994 by Susan Bergman

Published in Japan, 1997

by Shobun-sha Publisher, Tokyo

Japanese translation rights arranged

with Farrar, Straus & Giroux Inc., New York

through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

エイズで死んだ父へ

目次

序

10

1 仮面

15

2 娘たち

38

3 不吉な肖像画

62

4 賛美歌

78

5 めざめ

103

6 演技

131

7 ある友人 153

8 崩れゆく家族 171

9 父の死、その後 193

10 弟の死 230

11 出発 252

訳者あとがき 274

ブックデザイン

藤村 誠

ジャドソンに――

恍惚の蒸散するめまいのなか

あなたの顔に視線を据える

その顔は、わたしにとって、えもいえぬ要素
完璧な美と、はずされた仮面の……

エリノア・ワイリー

序

わたしたちが父のもうひとつの人生を知ったのは、父が死んだときだった。そのときから、わたしたちのもうひとつの人生が始まった。最後に父に会ったのは、一九八三年三月のある日曜日早朝のことだ。その日、わたしは当時住んでいたニューヨーク州のヨンカーズから車でダウンタウンに向かい、ベルグユー病院にいる父を訪ねた。オレンジ色の冬の太陽がイースト・リヴァーの、目玉を思わせる橋げたと、静脈のように青い水面を照らしていた。廊下に響く足音を聞きつけて、父が窓辺から振り返った。その頭は肩の上で浮遊し、肩は植物の傾いた茎を思わせるからだの上で、アルファベットの丁の横棒よろしく危ういバランスを保っていた。足を踏み出さないので、とわたしは思った。太陽の光線が、はるかな川面を行くはしけのたてる波が、わたしの吐息

が、父をひっくり返してしまふのでは、と怖れたからだ。電話をかけてきた医師によれば、父は倒れて頭を打ったという話だった。いよいよ痴呆の最終段階に達したということだ。父はそのとき四十五歳。

生気のないその目を見るかぎり、父にわたしのことがわかっていないのは明らかだった。水が欲しいんだ、頼む、と父はいった。「看護婦さん、水が飲みたいんだ、憲兵が来る前に……連中はもうそこまで来てる……頼む、水を飲ませてくれ」父がまたしても倒れそうになった。わたしは窓辺に突進し、父を支えた。「おまえか？」と父がいった。当惑した父の目にいつしか涙が浮かんでいた。「おまえか？」来訪者の出現に、突如、感極まってしまったようだ。父は髪を撫でつけた。しかし、その生え際はすでに後退し、額が広くなっていた。父の手が髭を撫でた。「おまえが来てくれるとは思わなかった」

二つのイメージ——色あせた青の病院のガウンをまとい死出の旅につこうとしている父と、信徒席最前列に坐る四人のわが子をうながして賛美歌をうたわせようとする教会の音楽監督としての父のイメージを、どうすれば重ね合わせる事ができただろう。明るい顔をしたおおらかな父の魅力と、生気の失せた黄ばんだ皮膚を。彼が装っていた人物と、その実像を。

わたしたちは当時まだ父の病気についてはほとんど知らなかった。肌点々と浮かぶ化膿性の吹き出物、身をよじるほどに激しい咳、方向感覚をなくした徘徊、視野狭窄、繰りかえし襲う発熱と悪寒、元気を回復したかと思えばつぎの日には枕から頭も上がらないという具合に変転めま

ぐるしい病状。予測不能で父に特有のものと思われたそうした病状も、実際には、一部の人々にとっては次第にその全貌が明らかになりつつあった病状の一端にすぎなかった。その一部の人々とは、すでにそうした病気の存在について報告を受けていた人々であり、恋人が同じ症状に苦しんだ経験を持ち、やがてみずからも同じ病にとりつかれたことを知った人々だった。しかし、わたしたちはそれを知らされていなかった。父は実験的な治療法を施されていたが、わたしたちにはそれが新たに名前を与えられたばかりの症状を抑えるための、最後の望みの綱と思われた。

いまなおわたしは、証拠を——ひとつの源へといたる手がかりの数々を、吟味せずにはいられない。父の引き出しから見つけた輸入物のキャンディ、部分かつらと日焼け用ジェルと興奮剤のアンブル。再発を繰り返す肝炎、退院中の父がともに暮した「ルームメイト」たち。父がその外で誰かを待っていた、グランド・セントラル・ステーションの男子用トイレ（わたしは偶然それを目撃したのだが、父はそれに気づいていなかった）。わたしは父の娘たちのひとり。ひとりの探偵であり、従者だ。

そしていま、わたしは父の秘密を探る旅人。家族から離れた人生が、どんな思いもよらぬ魅力をも父に提供していたのだろうか。持てるもののすべてを犠牲にしてもかまわないと思わせるほどの？ 父はどんなストレスを感じていたのだろうか。どれほど病的な警戒心——父ならばそれを「慎重さ」と呼んだだろうが——で、二つの姿を使い分けていたのだろうか。どんなにか孤独だったことだろう。お父さん、わたしはあなたの仮面のうしろを見たい。もうひとつの顔、壊れた顔

を。そして作りなおした思い出をこの胸に抱きたい。それもこれも、父を愛していたから、しかもいつもそれを表現できたとはかぎらないから、そして父が装っていた人物像をよみがえらせることは、わたしたちの人生の埋められた仮構を初めて掘りかえすことにつながるからだ。

人が初めて自分自身と他者について学ぶ場所が家庭であるなら、そこはまた、往々にして、誤ったアイデンティティと孤立をはぐくむ場所でもある。人間の偽りのうわべ、生きのびるために受けいれる偽りの役割、喪失の犠牲者たちの耐え方と回復の仕方、それとあいまって起きる喪失体験の解釈（それは自分自身が考えるみずからのイメージと他人が考えるわたしたちのイメージの双方に影響を与える）、セクシュアリティをかたちづくる幼時体験——人間は誰しも、そうした人生の断片を選びわけ、再構築する。そして最終的に、そこから生きる力を汲みとらなければならない。

したがって、わたしたち姉妹と母が二、三年前から語りはじめた物語、最近になって修正された人生の物語は、子ども時代のなじみある事実で始まり、時間とともに練りかえし語られることになる。すべりやすい外殻を剥ぎとられた内面の物語を語るように。あの父がいたればこそ、そしてあの父がいたにもかかわらず、わたしたちは感謝しながら、そして同時に怖れおのきながら、自分たちが何者であるかを語る。父には隠すべきものがあまりにも多かった。いまそのすべてを明るみに出さねばならない。

ここで語る物語では、たとえ人目にさらしたくない事実でもそれを和らげたり、最初に受けた

衝撃を書きかえたりといったことはいっさいしていない。ひょっとしたら、わたしはあまりにも長いこと母や姉妹、そして自分自身の苦しみをしゃぶりすぎたのかもしれない。しかし、たとえそうだとしても、わたしはあの事実を知って以来、ほかの人々のもっと過酷な苦しみに自分を重ねあわせてきた。エイズによる死の場合、たとえどんな選択をしても、二重、三重の苦悩を覚悟しなければならなかったのではないだろうか。

1 仮面

トゥーランドット　謎は三つあるのに、死はひとつだ！
カレフ　いや、それは違うぞ！　謎は三つ、生はひとつだ！

ブッチーニ

一九七七年夏、大学の二年次を終えたわたしは、アトランティック・シティの遊歩道から八階上にあるホテルの屋上プールで、監視員の仕事にありついた。賭博業者が腕力にものをいわせてアトランティック・シティに乗りこんできた年のことだ。カジノ紳士たちが、まもなくそこを追いつめられることになるはずの人々の鼻先で振りまわす手の切れるような新札に、眠ったようなゲッターの町が酔いしれていた。七月、マールボロ・ブレンハイム・ホテルは依然として、いまや昔日の威厳も風前の灯となったロビーを、さまざまな商談の場に提供していた。しかしそもそも、それから一年後には爆破され、それでもなお崩れずに残ったところは鉄球であとかたもなく解体されることになる。組織犯罪者の集団が集結し、白髪のご婦人連が町民集会でそれを口を極めて